sémanalyse における texte 概念

長野順子

ジュリア・クリステヴァは、「マラルメのテキスト《骰子一擲》に関する、文学的記号論の幾つかの問題」と題された論文において、構造主義言語学の批判的継承者として、独自の sémanalyse という方法を提唱している。その目的は、日常的な情報伝達的言語活動とは別の機能をもつ、いわゆる〈文学的〉言語活動における意味生成の現場を捉えることにある。しかしながらクリステヴァは sémanalyse の対象を、単に文学一般とかヤコブソンのいうような詩的言語と呼ばずに、一貫して、特別の意味をこめて《texte》と呼ぶ。そしてこの texte という概念そのものを精練してゆくことこそが、sémanalyse の具体的な方法論を明らかにしてゆくことにもなるのである。この小論では、sémanalyse とはどのようなものであるかを、それを根底から支えている texte という概念に特に焦点をあてて考えてみたい。

I　texte 概念の提示

クリステヴァはまず、記号体系と記号（能記的）実践 pratique signifiante とを対立させ、それを〈文学〉一般と texte との対立に対応させる。記号体系とは、もっぱら（思惟もしくは感情の）再現 représentation とその（デカルト的な）十全な主体という問題を中心軸として確立された一つの固定的な演繹的体系であり、それに基づいて例えばどれが文学でありそうでないかが容易に決定でき、また人々はそれに基づいていわば自動的にこれまでの文

化的活動全体を構造化してきたのである。しかしながら記号実践とは、そのような静的な記号体系には根本的に還元不可能な、記号による生きた意味生成そのものであり、意味と主体とがまさにそこで作動し発生し生成するその営み自体であり、そのような意味生成の営みの場となるのが texte である。そして記号実践の記号体系への還元不可能性を認める時、人はもはや演繹的体系によって保証される実体としての〈文学〉一般についてではなく、もっと多様な意味作用の局面をも含むことのできるダイナミックな動的対象としての texte について語らねばならないことになる。従ってまず texte とは何かということが定義されねばならず、また伝統的文学という〈実在的対象〉がどの程度まで texte と呼ばれる〈認識の対象〉となりうるか、そして、十九世紀以降の新しい〈文学的〉諸実践が、如何に texte と呼ばれるものの法則によって完璧に統制され支配されているかということを明らかにしなければならない。がしかし、差し当たり sémanalyse によって問われるのは、後者の型の記号実践（マラルメを創始者としてシュールレアリズムへと繋がる革新的な言語活動）であり、これらは現行の演繹的体系をゆさぶり、またそのことを通じて一つの文化全体の諸基盤さえをもゆさぶることのできるような texte である。

かくして sémanalyse がめざすのは、古典的修辞学とは全く異なり、能記に基づく作業の分析であり、それはまず texte 概念の設定によって始まるのである。そして sémanalyse が最終的に目標とするのは、個々の特殊な texte（文学とは限らない）における記号作動 opération signifiante を露呈させ、それらの記号作動が一つの神話的体系或いは学問の一つの発展段階に接合して、さらにそれらの神話的又は学的変形をその国語の組織すなわち言語活動全体の内へと置き換え、またそうすることによって、遂には、深い無意識的展開しか為さない社会的歴史の内へと転換するのを明らかにしてゆくような分析である。それ故〈文学的〉という語を拒否することによって sém-analyse は、その話題を言語活動の美的な一つの派生物に限定することを拒み、texte を歴史における意味生成の結晶とみなすのである。そのような大きな展望のもとにある texte の分析は、従って、文学と呼ばれるような所

産のみでなく〈歴史的〉〈政治的〉〈宗教的〉と呼ばれてきたすべての所産にも、それらが上記のような意味生成の場とみなされる限りにおいて、適用されうるのである。

II　texte概念の精練

このように新たに意義付けられた texte の研究を sémanalyse は次のような仕方で押し進める。つまり、texte を場とした記号実践の研究を諸〈記号〉によってふさいでしまうのではなく、むしろそれらの〈記号〉を解体しその内部に新たな外部を、すなわち Sollers のいう《反復可能な複合的風景をもつ新たな、意味生成の空間》を開示しようとするのである。もちろん texte は、諸記号の一つの組織を提示してはいるのだが、sémanalyse は、この組織の内側に一つの別の場面を開くのである。従って問題となるのは、組織の表面上の一貫性、統一性、形式等ではなく、その構造のフィルターが隠しているような全く新たな別の場面であり、一つの過程 procés としての意味生成であって、構造とは、その意味生成の《ずらされた起拱点》に他ならないのである。つまりアーチ型の一番頂上において起こる意味生成が構造化されるため記号の大地 terrain du signe へと落下する際、直線的にではなく弧を描いて落下するが故に、発生の拠点よりずらされざるを得ないのである。sémanalyse は、記号の大地を去ることはできないながらも、主体中心的な「記述する構造」という唯一の観点を捨てて、発生しつつある構造化の場面を取り戻そうとするのである。

sémanalyse は、この特殊な対象である texte が産み出す意味生成の法則を発見しなければならない。texte は、単なる美的文学的対象ではなく、国語の内に生起しながら、いわゆる言語学の対象である伝達の言語活動の既知のカテゴリーに還元することのできない、超・言語学的な作動であるからである。それはマラルメのいう《多数の語から一つの全体的な新たな、国語とは別物の語 mot をつくり出す詩句》のようなものである。この国語に対する

《別物性》étrangeté は、言語学的な伝達の意味作用の法則のみを、すべての記号活動に妥当する唯一の法則とみなすのを拒否し、それらの法則を貫いて《堀り下げ》てゆかねばならないことを意味している。それ故、sémanalyse は言語活動のすべての領野が伝達的言語活動の法則によって統一されていると見なす「神学化」への戦いをも含意しているのである。

さて以上のような、単に内容のない構造と表裏一体の実在的対象とは異なる、記号実践の場、意味生成の空間としての texte 概念をさらに具体的に精練するために、クリステヴァはチョムスキーの生成文法の方法論を適用する。生成文法は、有限な構造の不透明な表層を貫いて、伝達された言表の言外に含まれている無限の変形の過程を導入したが、その手続きの内で、sémanalyse に大きな影響を与えたのは主に、一つのモデルの二つの状態としての表層構造と深層構造の設定と、意味論的問題の厳密に統辞論的問題設定への置き換えということである。つまりまず第一に、記号実践における意味の産出を提示するという試みのために、〈二つの状態における一つのモデル〉が是非必要となるのである。また意味するものと意味されるものとの固定的な一対一対応として記号を考えるのでなく、飽くまでも意味するもの（能記）としての記号の働きの特殊な在り方に焦点をあてるが故に、実体的な意味を予め前提するような意味論的な問題設定は排除されなければならない。

Ⅲ　phéno - texte と géno - texte

クリステヴァは生成文法における表層構造と深層構造に代わって、ソヴィエトの言語学者達Šaumjan／Soboleva の術語から、phéno-texte と géno-texte という分け方を採用する。phéno-texte は、géno-texte によって支えられる現存する書かれた（又は言われた）構造そのものであり、géno-texte は、表層における構造を脱中心化するアノニムな産出のプロセスとしての能記の総体であり、構造の中では与えられていない能記の無限の複数性

の内へと構造を転換する。それ故 texte とは、そこで構造としての phéno-texte の生まれる一つの劇場のようなものである。但し、生成文法は伝達的言語の生成過程を明らかにするための方法論であるが、sémanalyse は、そのような日常的言語活動とは別物であるような texte を扱う研究であるが故に、生成文法の理論をそのままの形で引き継ぐのではなく、必要な改変を行なわなければならない。

さて、sémanalyse の対象とする texte が日常言語と異なるのは、統辞論的働きにおいては強制的な文法性に縛られない≪記号複合体≫の形成によってと、意味論的働きにおいては辞書的な意味の統一を破壊する新たなしかも開かれた意義素的総体の適用によってとの二つの点が挙げられる。これら二つの働きを導く原理は、日常言語においては塞がれたままの、もっぱら能記に帰せられた重要性であり、それは、能記と一対一で対応させられた固定的な所記に対する拒否と表裏一体である。

能記のみに依存しながら、無限に諸 texte の空間へと開かれてゆく諸意義素としての意味論的統一体と、変様するものとされるものとの統一体とから、一つの application が産み出される。そして、そのように飽くまでも能記を中心とした働きの故に、もはや統辞論／意味論の差異がおぼろになり始める。というのは、根源的な同一の application という作動がこの二つの領域を支配しているからである。意味論的 application は記号同士の隣接性や音声的類似等の拘束によって集められた意義素の全体から出発し、統辞論的 application は、能動的（変様する）カテゴリー対受動的（変様される）カテゴリー等の論理的拘束に従う。そして phéno-texte と géno-texte の二つの状態の間の亀裂は、様々の結合の論理において用いられるこの application という一つの働きから出発して埋められることになるのである。ここでいわれる application とは、生成文法において無限の深層構造と一つの確立された表層構造との間をつなぐ多様な変形の過程と比較することができるだろう。また、例えばフロイトが夢の形成のメカニズムにおいて認めている論理的関係としての類似、一致、接触、同等性等とも比較されうる。実際、フロイ

トの無意識下におけるこれら様々の作用の如く、記号実践における application もアノニムの内に無限の産出活動を行なうのである。そしてそこにおいて初めて新たな主体が生成してくるのであり、予め操作的な主体性が措定されてはならないのである。

かくして géno-texte とは、そこで意味生成が上演される詩的言語活動の機能の一つの状態であり、phéno-texte として提示されるもの（構造）の統辞論的・意味論的な無限の発生そのものである。texte とは、従って géno-texte の働きが phéno-texte の内に広げられ、phéno-texte が géno-texte を再現しようとしており、読者に意味生成を再構成するように促しているような言語活動の実践のことである。それ故 texte 概念は、古典的な再現のコードを破壊するような現代的な或る種の文学的実践（既ちマラルメ等）にすぐれて適用されることになるのである。

しかしながら、上記の如き texte 概念に基づいた sémanalyse の理論は、マラルメ自身の詩論に負うところが多く、マラルメの詩の分析を主に念頭において考えられたものであるともいえる。否むしろ、マラルメの詩の分析から逆にこういった方法が生まれてきたといっても過言ではないかも知れない。

従って sémanalyse は、他の様々の（文学的実践に限らない）texte に実際に応用し、その文化的構造全体への影響、さらにはそれらを支える歴史の大きな流れとの相関関係等を具体的に明らかにするという鍛練に耐えて初めて、確固とした一つの方法論として成立することができるであろう。

J. Kristeva, "Quelques problèmes de sémiotique littéraire à propos d'un texte de Mallarmé: *Un coup de dés*", in Essais de sémiotique poétique (A.J.Greimas éd.), Larousse, 1972.